

第

1

章

大 間 町 史



自

然

第1節

位置と地形

1 位置と面積

本州の最北端に位置する町 おおままち 大間町は、青森県下北半島の西北端の突出部、本州最北端に位置し、町の東側は風間浦村、南東はむつ市、南西は佐井村と接し、西から北は津軽海峡に面しています。南側の山岳地帯は、下北半島の中では低い標高といえるでしょう。町域は東西約8km、南北約15km、*総面積は52.1km²です（公有水面の埋立などで増えます）。

*総面積：「国土交通省 国土地理院令和3年度全国都道府県市区町村別面積調（1月1日時点）」

津軽海峡に面する海岸線は延長15kmに及び、その北端に大間町の象徴である大間崎があり、「こゝ本州最北端の地」との碑が建てられています。この突端から津軽海峡の水路約600mを隔てた弁天島にあるのが、おおまさき大間崎灯台です。鳥居島の異名を持つ弁天島は、周囲約1.8km、東西約270m、南北約360m、全島が岩石により構成されています。その中央にそびえる灯台は、東経140度58分、北緯41度33分の位置にあり、大間町の経緯度の基点です。大間町は、北海道おしま渡島地方の亀田半島と対峙し、函館市しおくびに35km、対岸の汐首岬までは、わずか17.5kmに位置して



本州最北端の地 大間崎



下北半島国定公園 大間崎

います。地図の上から眺めるだけでも、本州最北端の厳しい環境にあることを実感させられる地形です。

大間町の総面積52.1km²のうち、70%以上を国有林などの山林が占め、段丘に広がる田畑と原野を合わせた約25%がそれに次いでいます。そして、海岸沿いの大間・奥戸^{おくつべ}・材木の三地区の集落は、宅地としては全部合わせても1%にも満たず、公共施設や神社仏閣などが残りを占めているのが大間町の現状です。

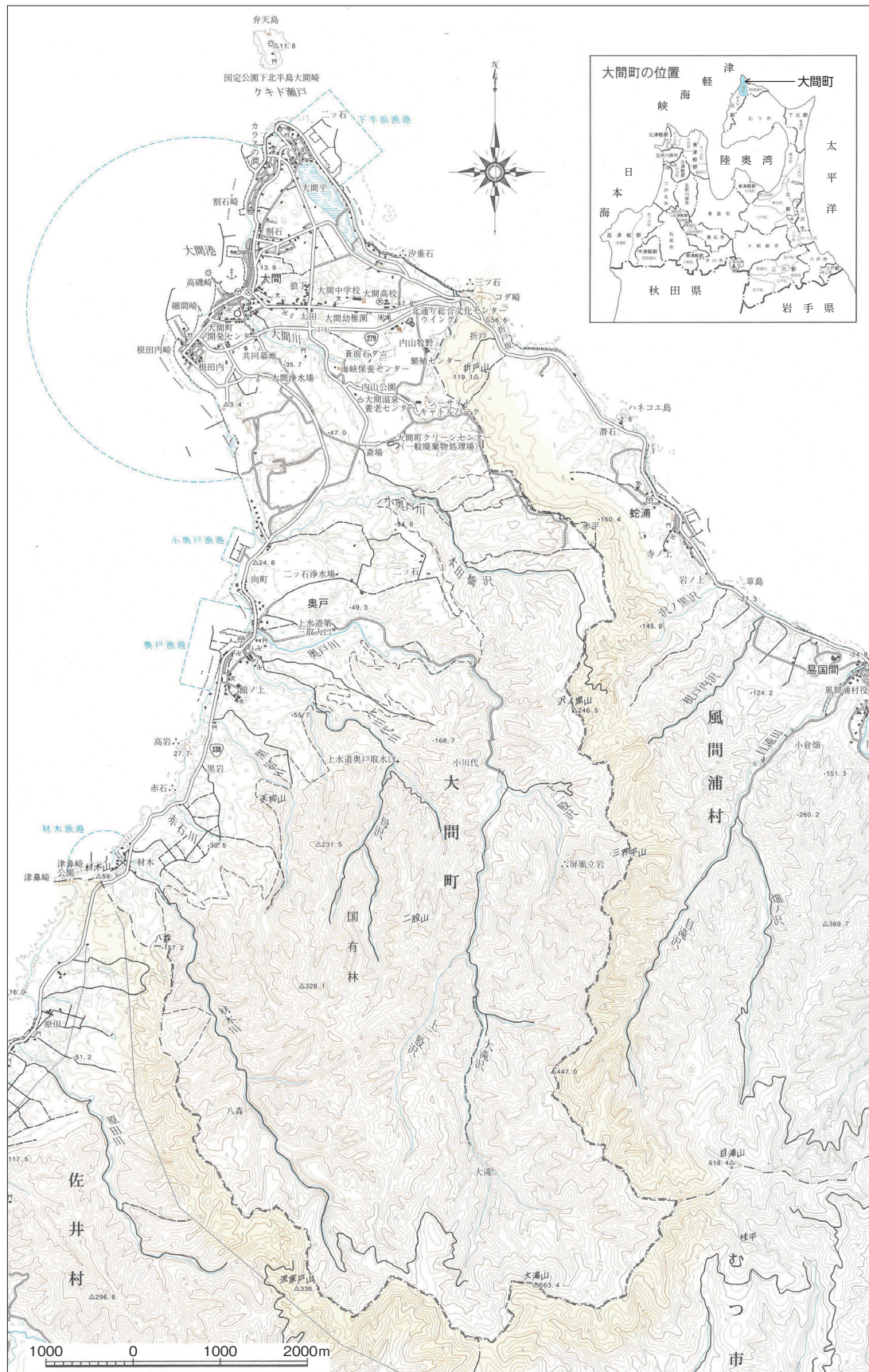
2 地形と海岸線

低い山々と小さな河川 大間町が位置する下北半島の西北部は、ほとんどが山地と海岸線によって占められています。

南西に隣接する佐井村域には、大作山^{たいさくやま}（776.3m）を筆頭に急峻な山々が連なりますが、大間町域に入ると、流家戸山^{ながれけとやま}（336.4m）、三界平山^{さんかいだいらやま}（346m）、大滝山^{おおたきやま}（563.4m）、折戸山^{おりとやま}（119.1m）など、急に低くなった山容が特徴です。

しかし、奥戸地区の東南にある大滝山をはじめ、材木地区の南にある材木山（60m）などは、起伏の激しい山であることに変わりはありません。奥戸地区の南にある黒岩山（231m）や天狗山（183m）、大間地区の東に位置する西吹付山^{にしふつけやま}（105m）などは、標高200mに満たないもの

図表1-1 大間町管内図



資料：大間町管内図（国土地理承認番号平23情便、第293-29344号）を加工



奥戸沖からの遠景（海岸段丘）

の姿が美しい山々です。

河川にも大河と言えるものはありません。最長の河川は、大滝山を水源とし、小川代川を合わせて奥戸湾に注ぐ、長さ8.7kmの奥戸川です。これに次ぐ材木山を水源とする材木川は、長さ約4.7kmで材木湾に注ぎます。ほかに大間内山から、大間地区の中央を貫流して大間湾に注ぐ大間川、赤石山から赤石湾に注ぐ赤石川、黒岩山と天狗山から発し黒岩湾に

注ぐ黒岩川、大間内山と木田橋沢から小奥戸湾に注ぐ小奥戸川、大間西吹付山東部から北西に流れて大間町と風間浦村の蛇浦地区の境界を流れる垂水川などが主な河川です。

延々続く海岸段丘 大間町の南東に位置するむつ市大畑町から大間崎へ向かう海岸線と、大間崎から佐井村へ向かう海岸線には、延々と続く階段状の海岸段丘が発達しています。最も高い段丘は、大間町と風間浦村の境界付近にある赤平段丘で、標高は150～170mです。

奥戸地区付近には、60m前後の奥戸高位段丘とそれよりも低い奥戸中位段丘があります。中位段丘は北海岸一帯にわたって延々と連なり、非常に平らかな面が特徴です。標高30～40m程度、牧場地の内山もこの段丘面上にあります。さらに低い奥戸低位段丘は、奥戸川や材木川、佐井村原田川などの河川の谷沿いに発達してきた段丘です。

これらの段丘は、40 万年前からの氷河時代と温暖な間氷期の海水面変化や土地隆起などの要因によって形成されたものと考えられています。氷期には海水面が100m以上も低下し、間氷期には5～10m 上昇する時期があったといわれ、両期の間には海水面は100m以上もの上下変化を繰り返したことになるわけです。

3 地質と火山岩

多彩な火成岩から成る地質 大間町と佐井村の西部山地の大部分は、新第三紀の火山砕屑岩から構成され、流紋岩・安山岩・玄武岩・花崗閃緑岩などの多彩な火成岩類（岩脈）が見られます。

大間崎の海岸で目に付くのが、緩く傾斜して海に没している黄褐色の地層です。調査の結果、新第三紀の深い海の中に堆積した頁岩が中心を占めており、海綿動物や珪藻の化石なども含まれています。この岩石の上に火山砕屑岩の地層が積み重なっています。これらの地層は大間層（頁岩）及び易国間層（火山砕屑岩、溶岩）と呼ばれ、大間町一帯に分布



赤石海岸（易国間層の溶岩からなる）

しているものです。弁天島は、すべて流紋岩から成っていますが、これも恐らく大間層の中の岩脈だろうと考えられています。

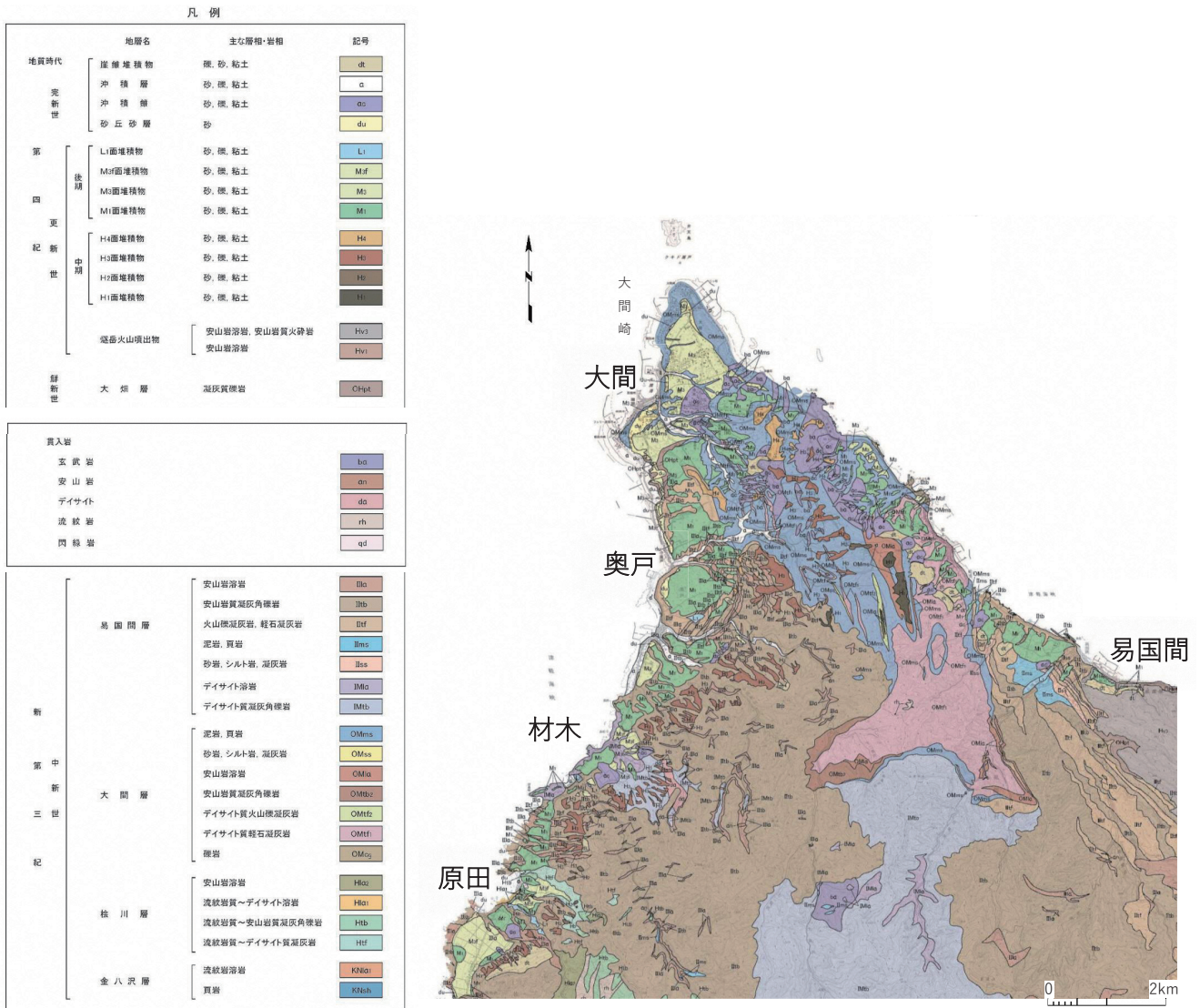
大間地域の基盤岩は、頁岩(大間層)及び火山砕屑岩(易国間層)で、これに新第三紀末期の凝灰質な礫岩が重なり、さらに第四紀には砂礫から成る段丘堆積物も重なるという多彩な地層を形成しています。大間層や易国間層は、2000～500万年前のまだ陸が形成される前の時代に、海底の泥や海底火山の噴出物が堆積したものと考えられています。

材木・弁天島・垂水などに分布する火成岩類は、大間層・易国間層に溶岩が貫入してできたものです。垂水の黒褐色頁岩は、このとき熱作用を受けて硬質化したものでしょう。その硬度によって、石器として利用されてきたといわれています。



津鼻崎の材木岩（易国間層の溶岩の柱状節理）

図表1-2 大間町の地形・地質・地質構造



(提供：電源開発株式会社)

第 2 節 気象と海

1 気 温

下北半島の陸と海 東側が太平洋、北側の津軽海峡、西側北部の津軽海峡と西部の平館海峡^{たいらだてかいきょう}、そして南側と半島頸部西側の陸奥湾^{むつわん}など、四方を海で囲まれているのが下北半島の特徴です。

気温分布の面からは、①太平洋型（下北半島の東側海岸部）、②下北半島の西側海岸部（日本海型）、③山岳型（恐山から西側の山岳部）、④平地型（むつ～川内の陸奥湾^{かろうち}沿い）の4種類に分類され、観測データから次のような事実が実証されています。

①1～3月と9～12月の計7か月については、太平洋型と日本海型の両海岸部は、山岳型や平地型の内陸部より高温です。陸地の温度の変化より海水温の変化が緩やかなため、秋から冬にかけては海水温が高くなるのが要因となっています。

②5～7月はその逆。陸地の温度上昇に対し、海水温の上昇が緩やかなことが原因です。

③4、8月は、双方の移り変わりの時期として海岸部と内陸部の気温はほぼ同じになります。

同じ海岸部でも、東側海岸部は寒流の影響を受け、西側海岸部は暖流の影響を受けるため一定ではなく、東側海岸部は西側海岸部より年間を通じて気温が低くなります。平成元年（1989）以来、青森県全体が一部を除いて暖冬傾向が続いていますが、中でも大間町は温暖な地域です。

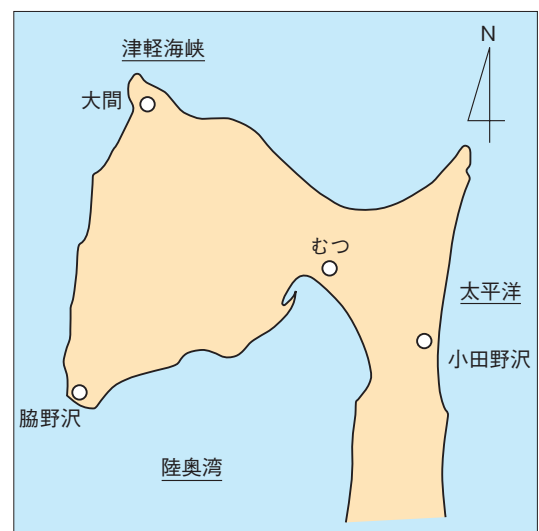
夏や冬の季節風も、下北半島各地の気温に大きな影響を与えます。夏は低温の太平洋からの風が東側海岸部に吹き付け、冬は温度の高い日本海からの風が西側海岸部に吹きます。こうしたことも、西側海岸部が年間を通じてより高温であることの大きな条件です。

冬暖かく夏涼しく 下北半島全体の気候から見る

と、大間町は「冬は暖かく夏は涼しい」地域です。

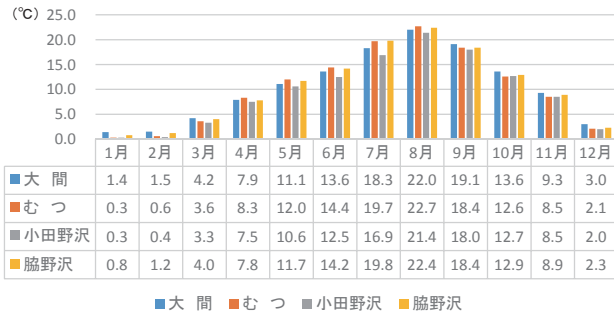
観測データによると、大間町の気温は他市町村に比べて、冬の気温が高く、盛夏は低いという数字が示されています。酷寒の季節の大間崎は厳しい寒さですが、温度計の数値からは、比較的過ごしやすい極北の町であるといえるでしょう。

図表 1-3 下北半島図

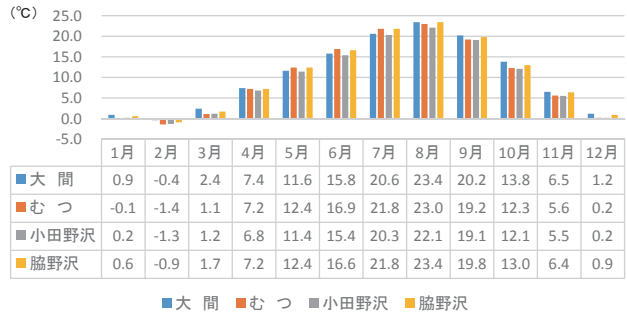


図表1-4 月別平均気温

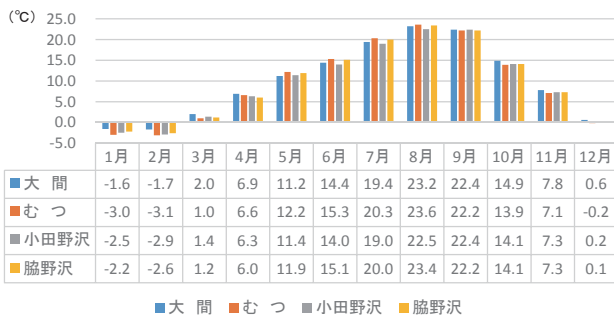
平成元年



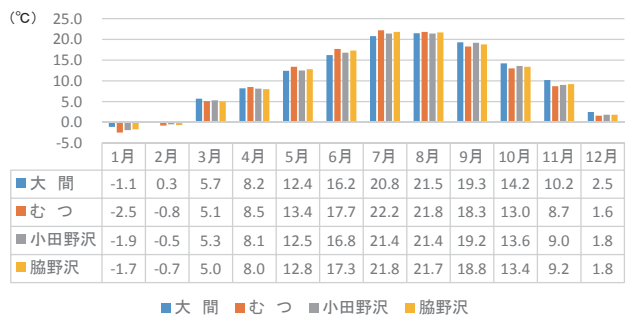
平成12年



平成24年



令和3年



資料：気象庁HP「各種データ・資料」より作成

2 風向きと風速

西風と東風と南西風が多い 大間町では、年間を通して最も多い風は西風（カミカゼ）であり、続いて東風（ヤマセ）、南西風（クダリヒカタ）の順です。



ヤマセ雲

最も多い西風は、10～3月にかけての季節風で、むつ市川内町や大間町では「カミカゼの風が吹くと大時化になる」と、漁師たちが恐れる風です。4～8月にかけては、東風や暖かさを運ぶ南西風が多く、この西風と東風、南西風で年間の3分の2以上を占め、ほかに北西風（タマカゼ）、北東風（シモヤマセ）、南東風（ミナミヤマセ）、南風（クダリ）、北風（アイ）などがあります。

図表 1-5 月別平均風速 (m/s)・最多風向

平成元年

地名 \ 月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大 間	3.5 W	3.3 WNW	2.7 W	3.5 WSW	2.7 SW	2.5 E	2.1 ENE	2.3 E	2.3 E	2.6 W	3.3 W	4.0 W
む つ	3.3 WNW	3.0 SW	3.1 NW	3.5 SW	3.3 SSW	2.8 ESE	2.6 NNE	2.9 E	2.5 SSW	2.9 SW	3.3 SW	3.5 W
小田野沢	3.4 WNW	3.0 WNW	3.0 WNW	4.0 W	3.1 SE	2.8 SE	2.1 SSE	2.6 SE	2.7 SE	3.1 WNW	3.1 WNW	3.6 WNW
脇野沢	3.2 WNW	2.8 W	3.0 WNW	3.2 W	2.9 WNW	3.5 E	2.5 ENE	2.9 ENE	2.8 WNW	3.1 WNW	3.0 W	3.4 W

平成12年

地名 \ 月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大 間	2.7 WNW	2.7 WNW	3.5 W	3.4 WSW	2.6 ENE	2.6 SW	2.1 SW	1.7 E	2.6 E	2.7 W	3.0 W	3.8 W
む つ	2.6 NW	2.5 NW	3.3 WSW	3.4 SW	2.6 NNE	2.5 S	2.3 SSW	2.1 SE	2.4 ESE	2.3 NW	2.6 NW	3.1 WNW
小田野沢	2.8 WNW	2.7 WNW	3.4 W	3.7 W	2.3 SE	2.3 SE	2.0 SE	2.2 SE	2.9 ESE	2.2 W	2.7 WNW	2.9 WNW
脇野沢	2.5 WNW	2.1 W	2.5 W	2.9 W	2.7 E	2.6 WNW	2.2 E	2.9 ESE	3.2 ESE	2.2 WNW	2.4 WNW	2.5 WNW

平成24年

地名 \ 月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大 間	4.4 WNW	5.0 W	4.3 W	3.8 ENE	3.9 ENE	3.2 ENE	3.1 ENE	2.5 ENE	2.3 E	3.6 W	4.3 W	5.3 W
む つ	2.4 WNW	2.8 WNW	2.8 SW	2.6 SW	2.6 NNE	2.3 NNE	2.2 SSW	2.2 NNE	2.1 ESE	2.7 SW	2.9 NWN	3.2 NWN
小田野沢	3.2 WNW	3.1 W	3.4 W	3.1 W	2.7 W	2.5 SE	2.2 SE	1.7 SE	2.4 ESE	3.1 W	3.4 WNW	3.7 W
脇野沢	2.8 W	2.7 W	2.8 WNW	2.9 ENE	2.7 E	3.4 E	2.7 E	2.1 E	3.0 E	3.0 W	2.8 W	2.9 W

令和3年

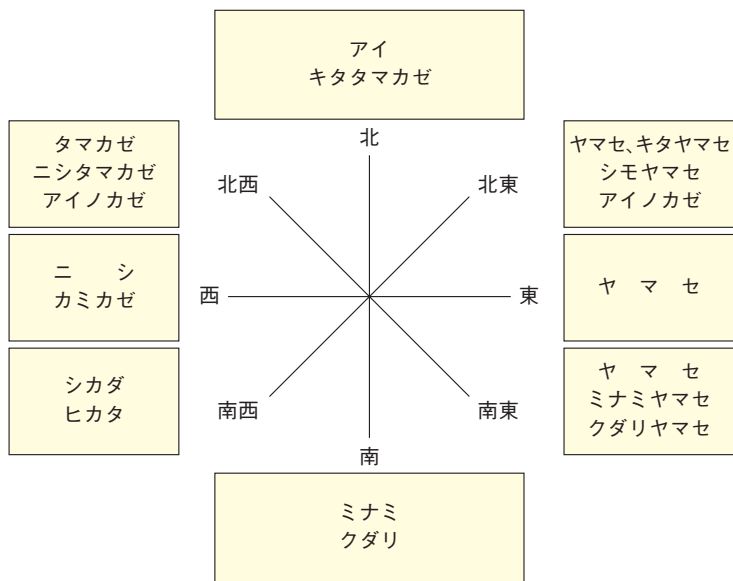
地名 \ 月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大 間	5.0 W	5.9 W	4.5 WSW	3.8 WSW	3.9 SW	3.5 ENE	3.2 ENE	3.4 E	2.4 E	2.9 W	4.4 W	4.6 W
む つ	2.5 WNW	3.3 W	2.8 SW	2.9 SSW	2.7 SW	2.3 ESE	2.2 ESE	2.4 ESE	2.1 NNE	2.1 NNE	2.7 SW	2.7 WNW
小田野沢	2.9 WNW	3.4 W	3.1 W	3.2 W	2.6 W	2.4 SE	2.2 SE	2.8 SE	2.8 SE	2.1 WNW	2.6 WNW	2.6 WNW
脇野沢	2.8 W	2.7 W	2.3 W	2.6 WNW	2.5 WNW	2.9 E	3.4 E	3.4 E	3.1 ESE	2.2 WNW	2.5 W	2.4 W

(E: 東、S: 南、W: 西、N: 北)

資料: 気象庁HP「各種データ・資料」より作成

冬に強く吹く偏西風 年間最も少ない北風と南風は、いずれも風速2～5 m級の弱いもので、この両者より頻度の多い北東・南東の風も強く吹くことはまれです。次に頻度の多い東風は時として強く吹きますが、平均風速では2 m前後です。最も多い西風と3番目に頻度の高い南西風も平均5 mにも満たない風速で、秋から冬にかけては強く吹きます。

図表1-6 風の方角別呼び名



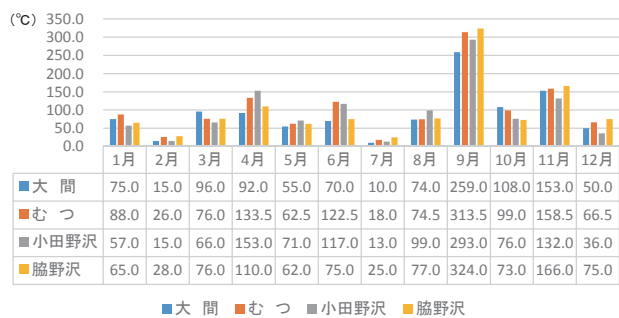
3 雨と雪

梅雨より多い9月の降水量 下北半島の降水量は、春から夏にかけて、太平洋岸の東側海岸部で西側海岸部に比べて多くなります。しかし、9月には逆転し、西側海岸部の降水量が多くなり、特に大間町では梅雨期の倍程度に及ぶ200mmに達する年が多くなります。9月はほとんど毎年変わることなく多量の降水量があり、10～1月の秋から冬にかけても、梅雨期に匹敵する降水量が記録されることが多くあります。4～8月、大間町の降水量が比較的少なくなるのは、太平洋岸である東側海岸部への降水量の増加という現象で説明できるでしょう。

西風の多い1～3月、10～12月に、日本海側の大間町や佐井村の降水量が多くなるのは、西風の場合、日本海の湿気を運んできますが山岳部に突き当たってから上昇し、雨になるよりは雪になるため、西側海岸部の降水量は多くなりません。

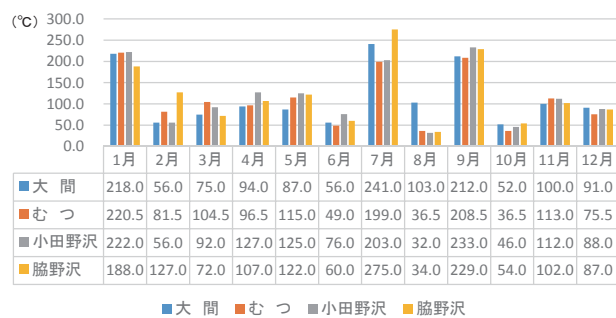
図表1-7 月別降水量 (mm)

平成元年



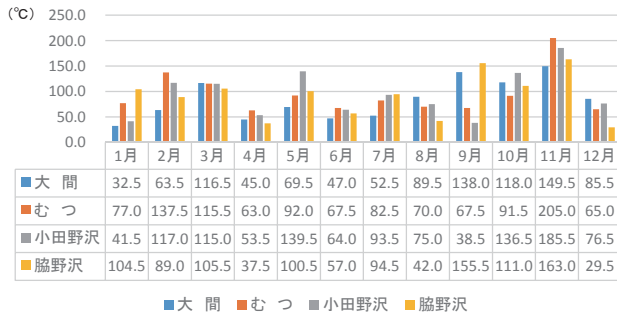
資料：気象庁HP「各種データ・資料」より作成

平成12年



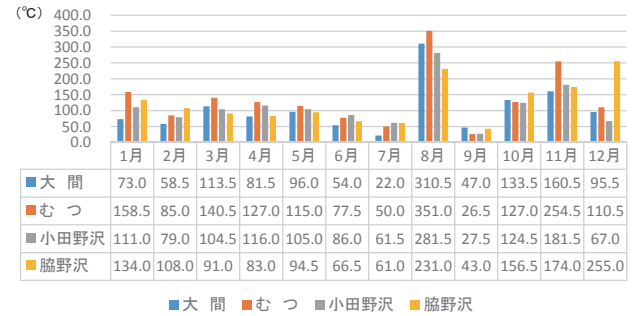
資料：同左

平成24年



資料：気象庁HP「各種データ・資料」より作成

令和3年



資料：同左

降雪も積雪も少ない むつ市に比べて下北半島西側海岸部に位置する大間町と佐井村の積雪量は段違いに少量です。激しく吹きつける西風が標高の低い下北半島西側山岳部に突き当たると、上昇して雪になるものの、さらに風に乗って山々を越えてむつ市などの陸奥湾に大量に降り積もります。

4 海流と潮流

2つの流れの強い潮流 津軽海峡の潮流については、上げ潮流は東方に、下げ潮流は西方に向かっていています。実際には、東方への一方流です。月が南北回帰線にある数日間のみ、下げ潮流が最強となり、西流になります。これは、西から東に向かう津軽暖流の勢いが強く、大勢はこの潮流に支配されているからです。また、大間崎と津軽半島の竜飛崎とを結んだ線より南には、時計回りの還流区域があり、同以北の主流線の勢力が弱いときには還流の勢力が増し、流速も弱くなります。

海流と潮流の漁業への影響 津軽暖流は、津軽海峡の西口から東へ向かって進みますが、この流れは下北半島側が優勢で、北海道側は親潮寒流に押されて、ややその勢いが衰えます。沿岸の地形によっても海流は左右され、直進しようとする海流は、沿岸の地形にくぼみがあると、くぼみに回りこんで逆向きの流れとなるわけです。さらにまた津軽暖流は、津軽半島に向かって陸奥湾に流れ込み、下北半島に沿って流れ出しています。このような津軽暖流と親潮寒流の季節ごとの消長が、下北半島全体の漁業に大きな影響を与えているのです。



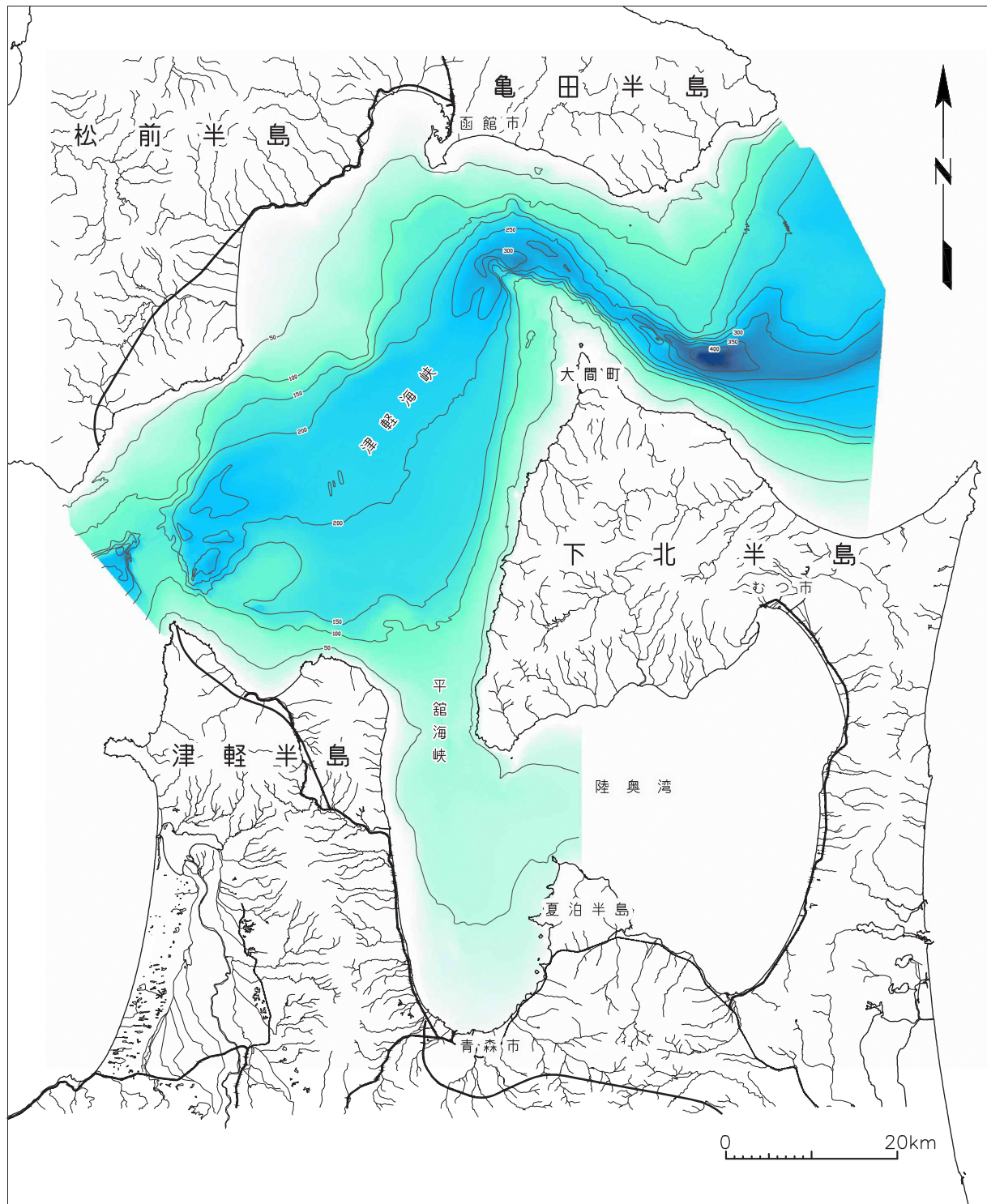
大間崎クキド瀬の潮の流れ

潮流は、潮の干満によって起こる海水の動きで、潮流の流向と流速も沿岸漁業と密接な関わりを持っています。潮流には、ほぼ一定方向とそのほぼ正反対方向の2つの流向があり、転流（潮流の向きが変わること）と転流までの時間は平均6時間12分です。こうした潮流の動きを大間町の漁業関係者は、

常に頭に入れて漁を行っています。

海底地形と海水温度 津軽海峡の海底地形は、北海道側が比較的緩やかな傾斜ですが、下北半島寄りに急激な傾斜面が存在します。大間崎から北方約5kmの沖合までは、比較的緩やかな傾斜の大陸棚ですが、水深100m前後の地点から急激に深くなり、水深240～280mの海底谷とな

図表1-8 津軽海峡海底地形図



(提供：電源開発株式会社)

ります。

一方、北海道側の汐首岬沖合からは、緩やかな大陸斜面が水深280m台の海底谷に接続する地形です。この急激に深い部分は、大間崎沖から尻屋崎の北にかけて海峡を東西方向に溝状に横断する地形をなしています。大間崎から奥戸地区、材木地区、そして佐井村方面にかけては、水深100mぐらいまでは緩やかな傾斜の地形が続いてから急に深くなっています。

1 哺乳類

奥戸川上流での調査 哺乳類は、弱肉強食の動物の世界では最も進化したグループです。ここで取り上げるのは、自然のままの野生動物として、大間町に生息している哺乳動物とします。

野生の哺乳類の生態を知ることは容易なことではありません。昭和41年（1966）から大間町奥戸川上流では継続的な調査が行われ、さまざまな情報が報告されています。これには調査に適する積雪期に動物たちの足跡をたどり、糞や食跡を調べ、その寝場所を突き止めるなどの苦労が続けられてきました。奥戸川上流では珍しい哺乳類の捕獲例も多く、近隣市町村も含めて、数々の野生哺乳類の生態を知ることのできる聖地です。その生態はまだ完全に知られていないものが多く、今後の調査・観察が期待されます。

中でもツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザルなどの大型哺乳動物が生息し、自然環境によりその生息密度が一定に保たれていることが注目されています。特に、ニホンザルとニホンカモシカは、天然記念物、特別天然記念物に指定されている貴重な存在です。

- ・ニホンザル 昭和45年（1970）11月11日に「下北半島のサルおよびサル生息北限地」として国の「天然記念物」に指定されました。
- ・ニホンカモシカ 昭和30年（1955）2月15日に国の「特別天然記念物」に指定されました。



ツキノワグマ



ニホンカモシカ



アカネズミ



コエゾイタチ



ニホンノウサギ



ホンドキツネ



ニホンアナグマ

このほか、ニホンノウサギやリス、ムササビ、モモンガ、アカネズミ、ヒメネズミ、ハタネズミ、ヒミズ、ホンドキツネ、キテン、ニホンアナグマ、エゾイタチ、コエゾイタチなどが、奥戸川上流の調査で生息が確認されています。厳しい気候条件にある、この地の動物保護は、主として森林保存の成否にかかっていると考えてよいでしょう。

大間町に生息する哺乳動物 一口に哺乳類といっても、食肉目・霊長目・偶蹄目など、さまざまな種類に分類されます。大間町奥戸川上流で調査され、大間町の周辺地区で生息しているとみられる哺乳類の主なものを列挙したのが図表1-9です。

食肉目のコエゾイタチは、別名をイイズナといい、奥戸川上流で足跡が確認され、むつ市で捕獲された例がありました。同じエゾイタチは一般にはオコジョと呼ばれるもので、奥戸川上流で足跡が確認されたほか、佐井村長後では人々に目撃されています。げっ歯目のハタネズミ・ヒメネズミ・トウホクヤチネズミ・アカネズミなどは、奥戸川の上流で捕獲され有名になりました。

平成8年(1996)4～11月、「北通の生物多様性を守る会」による弁天島自然環境調査では、ドブネズミを捕獲し、クマネズミやハツカネズミの生息の可能性も考えられると報告されています。

北限のサル 世界中に約200種類存在するといわれるサルのうち、大部分はアフリカ、インド、東南アジア、中南米など、熱帯を中心とした地域に生息していますが、その中で最も北にまで及んでいるのがニホンザルです。日本列島に生息する唯一のサルがニホンザルであり、中でも



北限のニホンザル

最北に生息しているのが下北半島のサルとなります。つまり、世界中のサルの中で北限に生息しているのが、下北半島のニホンザルというわけです。

下北半島のニホンザルは、昭和45年（1970）に国の天然記念物に指定されていますが、個体群・個体数の増加、生息域の拡大などから、人家周辺への定着が進んでいる状況となっています。そのため、農作物被害や地域住民とのあつれきが増大し、地域住民とニホンザルの共生対策が緊急の課題となり、下北半島に生息するニホンザルのモニタリング調査が実施されました。大間町でも多くのニホンザルが集落に現れ、農作物の被害も出ています。

下北半島のニホンザルの遺伝子を調べると、原始的なアカゲザルの遺伝子が非常によく保存されていることが判明しています。アカゲザルとは、大陸のサルの元になっている種で、そこからカニクイザルや台湾ザルが分かれ、さらにニホンザルが分かれてきたのです。従来は日本列島に大陸から渡ってきたニホンザルの群れが大きくなって分裂し、長い時間をかけて下北半島にたどりついたとされていましたが、遺伝子の分析から下北のサルは大陸から一直線に下北にやってきたと考えられるようになりました。

図表1-9 大間町周辺地区に生息する主な哺乳類

種類	生息する動物
食肉目	ツキノワグマ・タヌキ・キツネ・キテン・イタチ・コエゾイタチ・ニホンアナグマ
霊長目	ニホンザル
兔目	ニホンノウサギ
鯨偶蹄目	ニホンカモシカ
げっ歯目	リス・ホンシュウモモンガ・オウシュウムササビ・ヤマネ・トウホクヤチネズミ・ハタネズミ・ヒメネズミ・アカネズミ
翼手目	ホンドノレンコウモリ、コヤマコウモリ
食虫目	カワネズミ・ホンシュウヒズミ・アズマモグラ

2 鳥類

大間町の鳥類相は、主に3つの要素によって特徴づけられます。1つ目は大間町を分布域の北限とする陸鳥として、2つ目が大間崎を通過する渡り鳥として、3つ目が津軽海峡に暮らす海鳥としての要素です。



ウトウ



ノジコ



ヤツガシラ



オオセグロカモメ



ウミネコ



コクガン

分布北限の陸鳥 北海道と本州との間には、動物の分布境界となるブラキストン線が通っています。飛翔力を有する鳥類の中にもこの分布境界が当てはまり、大間町を分布の北限とする種や亜種は多くいます。例えば、アオゲラ、ヤマドリ、ノジコ、亜種カケス、亜種エナガなどが挙げられます（図表1-10参照）。

大間崎を通過する渡り鳥 渡り途中の陸鳥にとって、海は休んだり餌を捕ったりできず、天敵に襲われても隠れる場所がありません。そのため、海を渡る距離ができるだけ短くなるようにルートを取ります。また、猛禽類や水鳥など、海岸線に沿って移動する渡り鳥も多くいます。その結果、岬には多くの渡り鳥が集結します。大間崎やその周辺地域にも、渡り途中の旅鳥や迷鳥が数多く立ち寄ります。例えば、オオハクチョウ、ノスリ、ヒヨドリ、ヤツガシラ、カナダヅルなどが挙げられます。

津軽海峡の海鳥 大間崎沖の弁天島では海鳥であるウミネコ（約7,000巣）、オオセグロカモメ（約250巣）、ウトウ（約150巣）が集団繁殖します（平成26年調査）。風間浦村や佐井村との町境付近では魚食性の猛禽類であるミサゴも繁殖します。また、沿岸域ではコクガンやヒメウなどが越冬します。渡りの季節には、ハシボソミズナギドリやアカエリヒレアシシギなど多くの海鳥が日本海と太平洋とを結ぶ津軽海峡を通過していきます。大間崎周辺は海に突き出た地形のため、ミツユビカモメやミズナギドリ類などの外洋性の種も陸上から観察されます。いずれも海の世界連鎖の頂点に立ち、大間町や周辺の海の豊かさを象徴する存在といえます。

図表1-10 大間町で見られる主な鳥類の例

目	科	属	鳥名
キジ目	キジ科	ヤマドリ属 キジ属	ヤマドリ キジ
カモ目	カモ科	コクガン属 ハクチョウ属 マガモ属 スズガモ属 シノリガモ属 ビロードキンクロ属 ウミアイサ属	コクガン オオハクチョウ マガモ・カルガモ・コガモ スズガモ・キンクロハジロ シノリガモ ビロードキンクロ・クロガモ ウミアイサ
カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ属	カンムリカイツブリ・ハジロカイツブリ
ハト目	ハト科	キジバト属	キジバト
アビ目	アビ科	アビ属	オオハム・シロエリオオハム
ミズナギドリ目	ミズナギドリ科	オオミズナギドリ属 ハイイロミズナギドリ属	オオミズナギドリ ハイイロミズナギドリ・ ハシボソミズナギドリ
カツオドリ目	ウ科	ウ属	ヒメウ・ウミウ
ペリカン目	サギ科	アオサギ属	アオサギ・ダイサギ
ツル目	クイナ科	オオバン属	オオバン
カッコウ目	カッコウ科	カッコウ属	ホトトギス・カッコウ
ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ属	ヨタカ
チドリ目	シギ科 カモメ科 トウゾクカモメ科 ウミスズメ科	タシギ属 ダイシャクシギ属 キアシシギ属 イソシギ属 キョウジョシギ属 ヒレアシシギ属 ミツユビカモメ属 カモメ属 トウゾクカモメ属 ウミガラス属 ウミスズメ属	タシギ チュウシャクシギ キアシシギ イソシギ キョウジョシギ アカエリヒレアシシギ ミツユビカモメ ユリカモメ・ウミネコ・カモメ・ ワシカモメ・シロカモメ・セグロカモメ・オオ セグロカモメ トウゾクカモメ ハシブトウミガラス ウミスズメ・ウトウ
タカ目	ミサゴ科 タカ科	ミサゴ属 トビ属 オジロワシ属 ハイタカ属 ノスリ属 クマタカ属	ミサゴ トビ オジロワシ ハイタカ・オオタカ ノスリ クマタカ
フクロウ目	フクロウ科	フクロウ属	フクロウ
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ属	カワセミ
キツツキ目	キツツキ科	アカゲラ属 アオゲラ属	コゲラ・アカゲラ アオゲラ

目	科	属	鳥名	
ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ属	ハヤブサ	
スズメ目	モズ科	モズ属	モズ	
	カラス科	カケス属	カケス	
		カラス属	ハシボソガラス・ハシブトガラス	
		カササギ属	カササギ	
	クワイタダキ科	クワイタダキ属	クワイタダキ	
	シジュウカラ科	コガラ属	コガラ・ヤマガラ	
		ヒガラ属	ヒガラ	
		シジュウカラ属	シジュウカラ	
	ツバメ科	ツバメ属	ツバメ	
		イワツバメ属	イワツバメ	
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ属	ヒヨドリ	
	ウグイス科	ウグイス属	ウグイス	
	エナガ科	エナガ属	エナガ	
	ムシクイ科	ムシクイ属	センダイムシクイ	
	メジロ科	メジロ属	メジロ	
	センニュウ科	センニュウ属	エゾセンニュウ	
	ヨシキリ科	ヨシキリ属	オオヨシキリ・コヨシキリ	
	ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ属	ゴジュウカラ	
	キバシリ科	キバシリ属	キバシリ	
	ムクドリ科	ムクドリ属	ムクドリ・コムクドリ	
	カワガラス科	カワガラス属	カワガラス	
	ヒタキ科	トラツグミ属	トラツグミ	
			クロツグミ・シロハラ・アカハラ・ツグミ	
			ルリビタキ属	ルリビタキ
		ジョウビタキ属	ジョウビタキ	
			イソヒヨドリ属	イソヒヨドリ
			キビタキ属	キビタキ
		オオルリ属	オオルリ	
		スズメ科	スズメ属	スズメ
		セキレイ科	セキレイ属	キセキレイ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・ビンズイ・タヒバリ
		アトリ科	アトリ属	アトリ
			カワラヒワ属	カワラヒワ
			マヒワ属	マヒワ
	ベニマシコ属		ベニマシコ	
	イスカ属		イスカ	
	シメ属		シメ	
	イカル属		イカル	
	ホオジロ科		ホオジロ属	ホオジロ・ホオアカ・カシラダカ・アオジ・オオジュリン・ノジコ

* 分類及び順序は『日本鳥類目録 第7版』(日本鳥学会編集) に準拠
 * 赤字は大間町を北限とする種もしくは亜種

3 魚介類

大間町は、津軽海峡に面し、日本海と太平洋からの2つの海流が交差し、豊かな海産物に恵まれてきました。変化に富んだ潮流に育まれ、四季を通じて捕獲される魚介類として、クロソイ、ヤリイカ、スルメイカ、マダイ、アイナメ、スズキ、カレイ、タコ類、アワビなどが挙げられます。



クロソイ



アイナメ



スルメイカ

海辺や磯に生息し食用に採捕されているものに、貝類ではアサリ、イガイ（シュリ）、ムラサキインコ（マルゴ）、ヒレガイ（ネジリツブ）、クボガイ（磯ツブ）、ヨメガカサ（カサツケ）が、甲殻類でモクズガニ（川ガニ）、トゲクリガニ（味噌ガニ）、イシガニ（テッピガニ）、イワガニ（磯ガニ・島ガニ）、モエビ（エビ・藻エビ）などが挙げられます。

大間海域で見られる主な魚介類を挙げると図表1-11、1-12のようになります。

図表1-11 大間海域で見られる魚類

目	科	属	魚類名
スズキ目	スズキ科	スズキ属	スズキ
	サバ科	マグロ属	クロマグロ・ヨコワ（クロマグロ幼魚・メジマグロ）
		サバ属	マサバ・ゴマサバ
	マカジキ科	バショウカジキ属	バショウカジキ（カジキマグロ）
	カマス科	カマス属	カマス
	シイラ科	シイラ属	シイラ
	アジ科	マアジ属	マアジ
		シマアジ属	シマアジ（未成魚・小アジ）
		ブリ属	ブリ・フクラギ（ブリ幼魚・フクラゲ）
	イカナゴ科	イカナゴ属	イカナゴ（コウナゴ）
	ウミタナゴ科	ウミタナゴ属	ウミタナゴ（タナゴ）
		オキタナゴ属	オキタナゴ（トグチ）
	イシナギ科	イシナギ属	オオクチイシナギ（オヨ）
	ケムシカジカ科	ケムシカジカ属	ケムシカジカ（トウベツカジカ）
	カジカ科	ギスカジカ属	ギスカジカ（ギシカジカ）

目	科	属	魚類名
	タイ科	マダイ属	マダイ (タイ)
	マダイ亜科	チダイ属	チダイ (タイ)
	ベラ科	コブダイ属	コブダイ
		ササノハラベラ属	ホシササノベラ (ネズミリョ)
		キュウセン属	キュウセン (ネズミリョ)
	ダンゴウオ科	ホテウオ属	ホテウオ (ゴッコ)
	ホウボウ科	カナガシラ属	カナガシラ
	ニシキギンポ科	ニシキギンポ属	ギンポ (ガタナギ)
	イシダイ科	イシダイ属	イシダイ幼魚 (シマダイ・カタッピ)
カサゴ目	メバル科	カサゴ属	カサゴ
		メバル属	キツネメバル (ソイ)・クロソイ (ナガラ)・オウゴンムラ ゾイ・オオサガ (キンキン)・ウスメバル・エゾメバル (ガヤ)・ アコウダイ (メヌケ)
	アイナメ科	アイナメ属	アイナメ (アブラメ・アブラッコ)・クジメ (アイナメの幼魚・ イソテナ)
		ホッケ属	ホッケ (ローソクホッケ)
カレイ目	カレイ亜科	ババガレイ属	ババガレイ
		イシガレイ属	イシガレイ
		スナガレイ属	スナガレイ
	カレイ科	マガレイ属	マガレイ
		ムシガレイ属	ムシガレイ (水草ガレイ)
	ヒラメ科	ヒラメ属	ヒラメ (テクイ)
サケ目	サケ科	サケ属	サケ・カラフトマス・サクラマス
ダツ目	サヨリ科	サヨリ属	サヨリ
	トビウオ科	ハマトビウオ属	トビウオ・ホソトビウオ
	サンマ科	サンマ属	サンマ
ニシン目	ニシン科	マイワシ属	マイワシ (オオバイワシ)
		カタクチイワシ属	カタクチイワシ
	ウルメイワシ科	ウルメイワシ属	ウルメイワシ
タラ目	タラ科	マダラ属	マダラ
		スケトウタラ属	スケトウタラ
	チゴタラ科	チゴタラ属	エゾイソアイナメ (ドンコ)
ネコザメ目	ネコザメ科	ネコザメ属	ネコザメ
ツノザメ目	ツノザメ科	ツノザメ属	アブラツノザメ
メジロザメ目	トチザメ科	ホシザメ属	ホシザメ
ネズミザメ目	ネズミザメ科	ネズミザメ属	ネズミザメ (モウカザメ・カドザメ)
アンコウ目	アンコウ科	キアンコウ属	キアンコウ (アンコウ)
ウナギ目	ハモ科	ハモ属	ハモ
ボラ目	ボラ科	ボラ属	ボラ
フグ目	カワハギ科	ウマズラハギ属	ウマズラハギ (チュンチュ)
	フグ科	トラフグ属	クサフグ・アカメフグ
トビエイ目	アカエイ科	アカエイ属	アカエイ
ガンギエイ目	ガンギエイ科	メガネカスベ属	メガネカスベ (カスベ)

* () 内は地方での呼び名

図表1-12 大間海域で漁獲される水産動物・貝類

分類	種類	名前
軟体水産動物	イカ類	スルメイカ（夏イカ）・ヤリイカ（冬イカ）・アカイカ（ムラサキイカ）
	タコ類	ミスダコ・マダコ
貝類		エゾアワビ・サザエ・ヒラサザエ（ベコツブ）
棘皮水産動物	ウニ類	ムラサキウニ
	ナマコ類	マナマコ・アカナマコ・フジナマコ
その他水産動物	ホヤ類	マボヤ

*（ ）内は地方での呼び名

*市場魚介類図鑑による分類に準拠

第 4 節 植 物

1 下北の植物相

ブナとヒバが基本の林 日本の各地域の植物相は、植物の生育状況によって「ヤブツバキクラス」と「ブナクラス」に大別されるが、下北半島は「ブナクラス」に分類されます。下北半島は、基本となるのがブナで、その中にヒバが入っていることが特徴です。ほかにもさまざまな種類があることはもちろんのことで、例えば、沢沿いの地域では、サワグルミやトチ、カツラ、斜面の地域では、ミズナラ、コナラ、カシワ、北通りの地域、特に海岸ではミズナラが多く見られます。

海岸の植生は、奥戸地区から材木地区に向かって坂を登ると、左側に広がるシナノキとエゾイタヤの林にギョウジャニンニクが見られます。これが日本海側の典型的な海岸の植生です。

森林とともに変わる植物 人工造林については、ヒノキアスナロを伐採後に植林する、成長率の良いスギが主流でしたが、気象・地形・土壌によってはクロマツやアカマツ、落葉松も少し見られます。

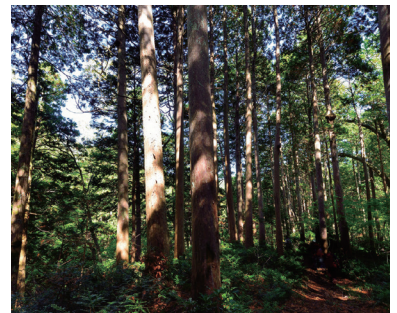
下北半島では、スギの適地は標高300mまでとされてきましたが、大石八森山の標高500m付近にも植林されるなど、一般的な林が人工林に変わった例は少なくありません。林相が変わると、林の下の植物相も変化するものです。広葉樹の天然林なら日光が直接地面に届くため、さまざまな植物が林の中に育ちますが、スギなどの人工林は日光が差し込まず非常に暗く痩せていて、地面に育つさまざまな植物の対応性がなくなってきます。そのため、人工林には珍しい植物は徐々になくなっていくわけです。こうしたことは動物にも大きな影響を与え、貧弱な植物相の人工林の中では、動物相も単純で貧弱なものになってしまいます。



ブナ



ミズナラ



ヒバ

山地植生と林相の構成 下北半島の基本的な森林はブナとヒバですが、その構成にはさまざまな種類があり、天然の森林も次から次へと変化している状況です。現在の下北半島の山地植生は、ミズナラーイタヤ林、ブナーミズナラ林、ブナ林、サワグルミートチ林、ヒノキアスナロー

ブナ林（図表1-13）と、人工林の林相に分けられます。

図表1-13 下北半島の林相

林相の構成	解説
①ミズナラーイタヤ林	広く分布し、人家に近い雑木林はおおむねこの林相。ミズナラやエゾイタヤ、ベニイタヤを主体に、ヤマハンノキ・サクラ・カエデなどが混じり、低木にはツツジ・クロモジ・ウツギ類などがある。ツルものにはヤマブドウ・ミツバアケビ・サンカクヅル・ツタウルシがあり、地面にはキツネノボタン・キンミズヒキ・チゴユリ・トリアシショウマ・イヌヨモギ・オオバタチツボスミレ・アキノキリンソウなど。
②ブナーミズナラ林	緩やかな斜面や尾根沿いに見られる林相。ブナ・ミズナラを主体にハウチワカエデ・ウワミズザクラ・コバノトリネコなどが混じり、低木にはオオバクロモジ・ミネカエデ・ノリウツギユリなど、ツルものにはツタウルシ・ヤマブドウ・ツルアジサイ・イワガラミなど、地面にはチゴユリ・マイズルソウ・ユキザサ・オクノカンスゲ・シシガシラ・シノブカグマ・オシダ・ヤマソテツ・イヌガンソク・ツルアリドウシ・スミレサイシンなどがある。
③ブナ林	ブナの純林は、燧岳 <small>ひうちだけ</small> やカモシカラインの湯の川越しの峠などで見られるが、通常、ナナカマド・ハウチワカエデ・コバノトネリコ・ミネカエデなどが混じり、低木にはオオバクロモジ・オオカメノキ・ノリウツギ・ハイイヌガヤなど。ツルものには、ツルアジサイ・ツタウルシナドが入り、地面にはユキザサ・チゴユリ・マイズルソウ・ツルアリドウシ・アケボノシュスラン・シノブカグマ・コケシノブ・エンレイソウ・ギンリョウソウ・ホソバノトウゲシバなどが育つ。
④サワグルミートチ林	沢沿いの湿潤な地帯によく発達し、林床の植物の種類も多い。広く各地に分布し、サワグルミ・トチ・カツラを主体として、ベニイタヤ・オニイタヤ・ヤマハンノキ・ウワミザクラ・シウリザクラなどが混じり、低木にはオオバクロモジ・キブシ・ウリノキ・オオカメノキ・ノリウツギ・ニフトコ・エゾアジサイ・ムラサキヤシオなど。ツルものには、ヤマブドウ・サルナシ・マタタビ・ミヤママタタビ・ツルウメモドキ・サンカクヅル・ツルアジサイ・ツクウルシなどが入り、地面には、ミヤマイラクサ・ムカゴイラクサ・タマブキ・ノブキ・アキタブキ・ヤグルマソウ・アカソ・アゼスゲ・ヨブスマソウ・オニシモツケ・タチアザミ・サワアザミ・エゾノヒレアザミ・アマブキショウマ・クジャクシダ・リョウメンシダ・ナライシダ・モミジガサ・ツリフネソウ・キツリフネなどが育つ。
⑤ヒノキアスナローブナ林	下北半島の主体であり、部分的に純林をなすこともあるが、沢沿い・斜面・尾根、その他広範囲で混交している。ヒノキアスナロ・ブナを主体に、ミズナラ・カツラ・サワグルミが混じり、低木にはオオバクロモジ・オオカメノキ・ツノハシバミなど、ツルものには、ツルウメモドキ・アマブドウ・マタタビ・サルナシなどが入り、地面にはオクノカンスゲ・ホソバノトウゲシバ・ユキザサ・ナライシダ・オシダなどが育つ。

2 珍しい植物

2種類ある珍しい植物 本州最北端にありながら、下北半島全体が日本海岸の要素を強く持った亜高山帯を欠く温帯植物相といえますが、本格的なものではなくても高山植物と呼べるもの

もあり、かなり多彩な植物群があります。



ヒメホテイラン



オサバグサ



オオサクラソウ

珍しい植物は、分布が広く繁殖（群生）しやすい植物の中にあるものと、分布が狭く一定の環境でしか繁殖することができない植物との2種類があり、前者ではホテイランが挙げられます。特にヒバ林の中で美しさを際立たせているのが、布袋様の腹部のような袋状の唇弁が付いているヒメホテイランです。最近では、ヒバ林の減少や採集によって年々減少しています。

針葉樹の中に葉をキレギレに広げ、中から芽を立てて白い花を美しく咲かせているのがオサバグサです。オオサクラソウは、少なくなったものの奥戸川流域でまだ散見される貴重な植物となっています。

後者の代表例である材木地区のシャクナゲは、ピンク色で、日本で一番美しいという評判がありました。



ユキワリソウ

屏風立岩は植物の宝庫 奥戸の屏風立岩周辺は、春の美しい植物の宝庫として知られています。まず挙げられるのはユキワリソウ、よじれた実と白い花が特徴のエゾイヌナズナやミチノクコザクラの亜種オコッペコザクラの小さな群落が見られます。

3 海 藻

海の植物と北限の海藻 大間町の豊かな海産物の中で、海藻は重要な位置を占めています。主な海藻類の漁期と漁具漁法では、コンブは、7月上旬～10月下旬まで、マンケ曳き、カギ採りなどによって採取されます。ワカメは3～6月下旬まで採集され、採集方法はカマ採りによる



フノリ



ワカメ

ものが大半です。アマノリは、主に冬季間に採集され、その方法はクシ採りです。ツノマタは、4月上旬～11月中旬まで採集され、採集方法はササラホク採りです。テングサは4月上旬～11月下旬まで採集され、同じくササラホク採りによって行われます。ヒジキは12月上旬～4月下旬まで、採集方法はマキリ採りです。エゴノリは、7月中旬～10月下旬までクマデ採り、ねじり採りにより採集されます。フノリは、12月上旬～3月中旬まで、手探りによる採集です。モズクは、6月上旬～9月下旬まで、クマデ採り、ササラホク採りにより採集されます。

平成期では、海の変化により、多量に繁殖しているツルアラメコンブは、ねじり漁法により、おおむね4～6月に計画的に採取されます。

また、10月には、コンブ繁殖漁場の造成という観点から、ツルアラメの駆除がねじり漁法とマンケ漁法により行われています。

大間海域で見られる海藻類を抜粋すると図表1-

14のようになります。

図表1-14 大間海域で見られる海藻類

種類	海藻名
海藻類	ボタンアオサ・ホソジュズモ・フサイワツタ・ハヒミル・ウルシグサ・ケウルシグサ・ツルモ・ジョロモク・ウミトラノオ・オホノリ・コトジツノマタ・トチャカ・ヒラコトデ・シキンノリ・カイノリ・イボノリ・ホソバノトサカモドキ・トゲイギス・イシカニノオ・オホシコロ・イソムラサキ・アカモク・スメハノリ・シホクサ・ユヒキリ・トサカノリ